

邪見憍慢の惡衆生とはとんでもない惡者のように考えて、自分は本願力に信順したように自惚れているが、「泥棒を捕えて見れば我が子なり、逆謗をおさえて見れば我が機なり」の流儀で、邪見憍慢も他人ではないのだ。

邪見とは、因果を撥無する者のみではない。自分は宿善が厚いからと早合点をして、他人がどれだけ深刻に求道さされているかは気がつかないで、つまり自分の程度の遅れている事は知らないで、他人の信仰の批評をすれば邪見なのだ。

何故かと言えば開發さされた境地は、「善も欲しからず惡も恐れなし」十方法界の功德を全領して、動く儘が南無阿弥陀仏だ。こんな自由の天地、無我な境地が有るとは知らなにと、実地の体験を語れば、そんな大慶喜が凡夫にあらるものか、大間違いの親玉だと

悪口わるくち言いっているのが邪見じゃけんなのだ。

傲慢きようまんとは、自分じぶんは素直すなおな者ものと自惚うぬぼれていて合点がってんを深心じんしんと思おもい、話はなしの判わかったのを体験たいけんと思おもい、涙なみだの出でる時ときの称名しょうみょうを他力廻向たうきえこうのようたりきえこうに考かんがえ、何時いつとはなしに戴いたいた積つもりでいるけれど、それは調機誘引ちようきゆういんの入口いりぐちにある事ことも知しらず、あら心得こころえやすやと調子ちようしに乘のり、戴いたいた信しんが誠まことならと高上たかあがりして他人たにんの煩悶はんもんしているのを、機きを見みるから手間てまが掛かかるのだと澄すましているのが傲慢きようまんなのだ。

何故なぜかと言いえば、久遠劫くおんごうから流転るてんしていながら、三仏さんぶつを泣なかして置おきながら、難化なんけの劣機れつきを包つつんで素直すなおになぞとは親様おやさまを瞞だましている事ことに氣きがつかないのだ。宗教しゆうきやうは熱心ねっしんに成なれば成なる程身動ほどみうごきならぬ業ごうの深さふかに驚おどろかされて、死後しごの往生おうじやうよりも現げんざい在ざいの開かい発はつを願ねがうのだ。遠とおい向むこうの快楽かいらくよりも現げんざい在ざいの感かん謝しゃを求もとむるのだ。仮令たと大だい千せん世せ界かいに満みちた火ひをも過すぎても聞きき拔ぬかねばと進すすむ時ときが難中なんちゆうの難なんなのだ。それそれを突破とつぱさされて撰せん取しゆされた時ときがあら心得こころえやすの安心あんじんやに

成るのだと聞かされても、他力がそんなに難しくて誰が出来るものか、唯を唯と素直に戴けばよいのだと、片付けて戴いた積りでいるのを僣慢と言うのだ。

聖人様は正信偈に「邪見僣慢の悪衆生は信樂を受持すること甚だ以て難し、難中の難中の難に過ぎたるはなし」と仰せられてあるが、どんな痛烈なご意見でも、どんな御悲痛な御教化でも無眼人無耳人には反響がないように、自分が邪見僣慢の悪衆生と思わない人には難中の難は響かない。信樂を受持することが出来ないのが当然なのだ。

五兆の願行を打ち込まれ、十劫の昔に正覺を成就遊ばしても、機法一体、願行具足に整うていても、機受の信相が抜けていては自分の物に成っていないではないか。いかに法体は成就してあっても機無円成が無かったら、無歸命安心に終わるではないか。機を見るな、その機に用事がない、助かっているぞ、見れば手間が掛かるぞ、と包んで置くのを他力のように心得て、有難がらす感情ばかり育てて、死にさえすれば往生と釣っていくが、それでは

十劫秘事、法体募り、本願ばかりに成るぞ。如何に成就されてあつても、機中に印現しなければ自分の物に成らないではないか。仏智満入しなかったら大満足は出来ないではないか。仏凡一体の境地に入らなかったら明日の往生の安心が出来ないではないか。

「月が出たか出ぬかを疑えよ、水に映るか映らぬかを疑うべからず」尤もだ。「弥陀が正覺を取り給うたか給わざるかを疑えよ、衆生の往生が出来るか出来ぬかを疑うべからず」尤もだ。月が昇つていると承知しながら、自分の心に蓋の有る事を知らないで月ばかり眺めてゐるのだ。十劫の昔に正覺取り給ひし事は話に聞いているけれども、自分の心に疑蓋の有る事を知らないで、法の噂ばかりしているのだ。

何故心に映った月をよく見ないのだ。何故機中に印現した親様の念力を受け取りきらないのだ。機を見れば手間が掛かると蓋してゐるではないか。手間の掛かる後暗い心を包んでゐるから、無量永劫流転している事に気がつかないではないか。鏡に向かわなかったら姿は

見えないのだ。法に向えば必ず機が見えるのだ。口で言っている地獄一定は話に聞いているのだから、実地の望みの綱の切れた味には成っていないのだ。照育の光明で照らし出された難化の機は、素直な柄でもなければ、真面目な柄でもないのだ。相手次第では親でも他人でも呪うほどの悪性を持ち、謗法闡提の強情者であり、三世の諸仏は呆れて逃げられ、八千遍の御苦勞も空しく、御親には十劫已来立たしておきながら、素直な者と自認しているのだから、度し難い代物ではないか。そんな難物だから法に包まれながら法を知らず、機を見せつけられながら機が判らず、信前も信後も、真仮の分際も何にも判らんづくで、死にさえすれば往生と平気でいるが、御親の永劫の涙は、難化に驚いた時の涙でなければ受け取れないぞ。唯除五逆と切り墮とされた人でなければ、若不生者の念力は体得できないぞ。

真宗の道俗よ、邪見憍慢の悪衆生とは、素直な柄と自惚れて学問や理屈で合点し、感情で調子を合わして慶んで、真剣に深刻に平生業成を力説する人を異解異安心と攻撃している

人の事を仰つてあるのだぞ。他人を攻撃している位だから、自分の程度は全然判らないのだ。判らないから盲人蛇に怖じだ。だから第十八願の信樂開発までは、微塵劫を超過しても到達し切らないのだ。情けないではないか、称名しながら流転するとは。哀れではないか、憶念しながら沈淪するとは。